

# 岡山後楽園のハス



大賀蓮



一天四海

後楽園では、ピンクの可憐な花を咲かせる「大賀蓮」と、気品ある白い大輪の花「一天いってん四海しかい」が楽しめます。

## ○ハスの特徴

ハスの花は、夜明けとともに開き、日が高くなるころには閉じてしまいます。大きく開いた優美なハスの花が楽しめるのは、午前中の早い時間だけなのです。

そして、開いてから4日目には散ってしまいます。

1日目はほんの少しだけ開いて、閉じてしまいます。



2日目は大きく開いて、一番の見頃になります。そして、昼前にはまた閉じてしまいます。

3日目はさらに大きく開き、色が少し白っぽくなります。少しだけ閉じます。



4日目は開ききってそのまま散ってしまいます。

大賀蓮 …別名「二千年蓮・古代蓮」。

淡いピンクで直径25cmくらいの花が咲く可憐なハスです。

岡山市出身の植物学者大賀一郎博士が、1951年に、千葉県検見川にある約二千年前の地層から発見した3粒のハスの実のうち1粒が、発芽・生育に成功しました。

同じ地層から出土した丸木舟の年代測定によって、このハスの実は、二千年前の古蓮と推定されました。その1粒から3本の蓮根ができ、後に次々と分根されていきました。これまでに、実や蓮根によって国内外の150か所以上に分根されています。

二千年前の1粒の古蓮の実から咲いた可憐な花は、時代を経て、今も友好と平和の使者として親しまれ大切にされています。

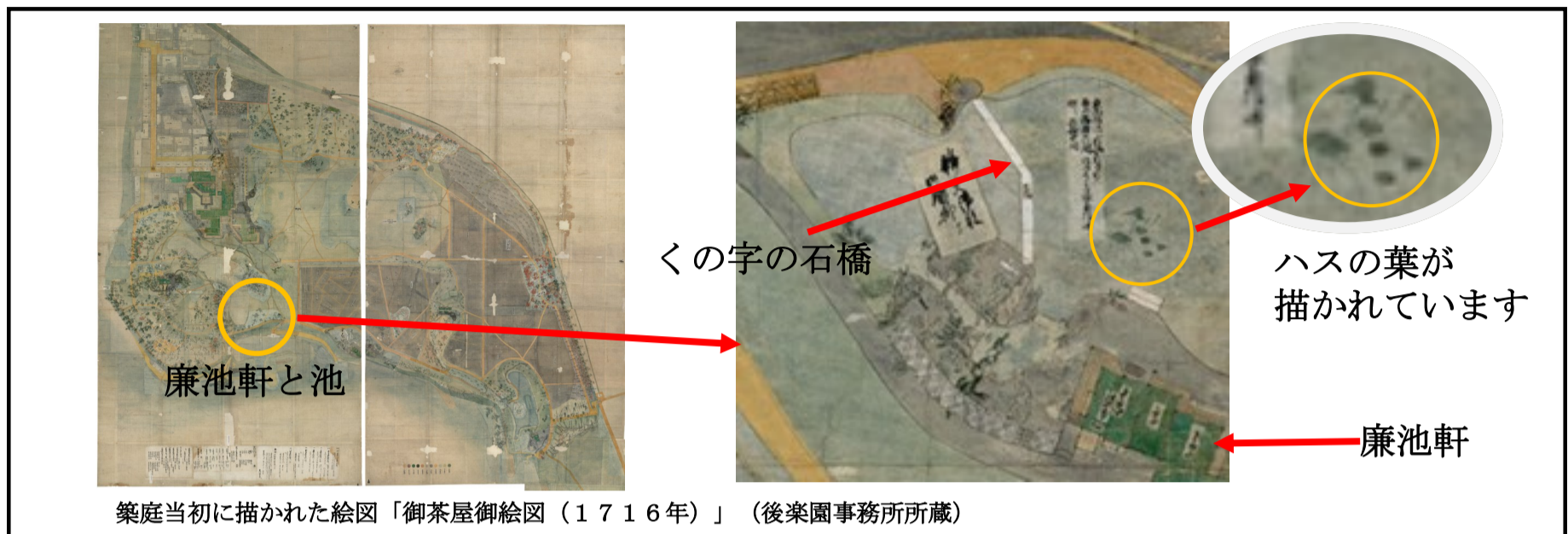
大賀博士は、古蓮、ハスの開花音、ハス糸などハスに関する幅広い研究を続け、大賀蓮の発見によりハス博士と呼ばれるようになりました。

一天四海…花の直径が30cmにも及ぶ大型のハス。白い花卉に不規則な紫の縁取りがあり、豪快かつ気品にあふれた姿から、大名蓮だいみょうはすと呼ばれることもあります。

## ○江戸時代の後楽園とハス

江戸時代の絵図では、築庭当時（享保元年 1716年）に描かれた絵図にだけハスが描かれています。場所は廉池軒<sup>れんちけん</sup>の前の池。後楽園の築庭を命じた池田綱政公<sup>いけだつなまさ</sup>は、廉池軒からハスを眺めていたのでしょう。

ちなみに、廉池軒については、「れん」という音の響きから、ハスの花を表す「蓮」の文字を連想させますが、築庭当時から「蓮」ではなく「廉」という字が使われています。



## ○現在のハス

後楽園では、昭和29年（1954年）に、来園者の四季の楽しみ方の一つにと、鳥取城から「一天四海」の株を譲り受け、花葉の池の栄唱橋東側に植えていました。

その2年後の昭和31年（1956年）に、故大賀一郎博士から「大賀蓮」の寄贈を受け、栄唱橋の西側に移植。2種類のハスを楽しんでいただけるようになりました。

その後、台風等から守るため、大賀蓮を園内東にある井田<sup>せいでん</sup>に移しました。今では花葉の池で「一天四海」、井田で「大賀蓮」を観賞することができます。



花葉の池の「一天四海」



井田の「大賀蓮」

## ○ハスを守るために

当時の大賀蓮は、自然淘汰や罹病により、残念なことに途絶えてしまいました。

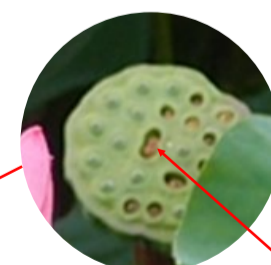
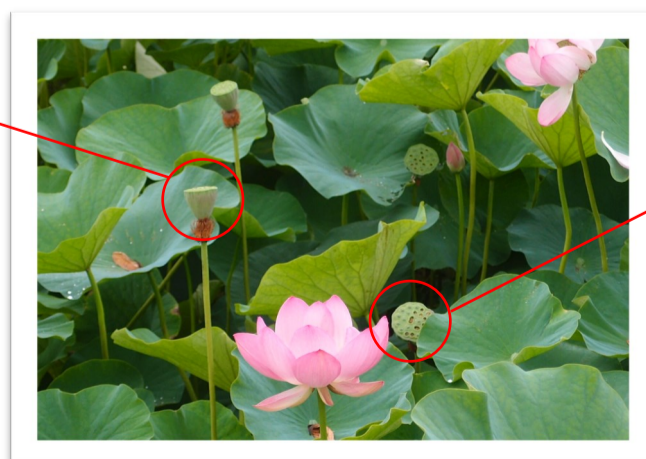
現在の後楽園の大賀蓮は島根県出雲市斐川町荒神谷史跡公園から株を分譲していただいたもので、純粋な大賀蓮を大切に守り美しい花を楽しんでいただけるよう維持管理に努めています。

大賀蓮の遺伝子を保存するために、蓮根による栄養繁殖で栽培しています。冬場の土作りや夏の生育期の肥料散布。そして花の色や形質の変化をおこしやすい種子繁殖は行わず、他のハスと交雑しないよう、実を結んで井田内に落ちる前に花托を回収しています。（回収した花托と種は、恒例行事「観蓮節」で販売するなどご来園いただいた方へのサービスに活用しています。）

一天四海はもともと強い品種で、大賀蓮のように手はかかりませんが、やはり交雑を避けるため花托の回収と、先祖帰りした花（色の異なった花）を刈り取るなど、品種の維持に努めています。



ハスの花托



種ができています

## ○恒例行事「観蓮節」

毎年7月第一日曜日、午前4時に開園し、夜明けとともに咲き始めるハスの花の観賞をしていただく行事です。箏曲の演奏や茶会などの催しを行います。